


獨協大学長殿

学外研修報告書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報告日	2020年 5月 30日	所属	経済学部経済学科
職名	教授	氏名	岡田圭子 
研修種別	1. 海外 ②. 国内	研修種類	①. 長期 2. 短期
研修期間	2019年 3月 31日	～	2020年 3月 30日
学外における主な研修機関および訪問先 札幌市立大学（町田佳世子教授） 札幌新陽高等学校（小熊あずさ教諭、志賀美沙子教諭）			
出張目的または研究題目 英語教育における高大連携			
資格 1. 平成 31 年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（)			
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額		50万円	
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入） （次ページより）			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

(1) 研修経過の詳細・本研究の端緒

本研究は、英語教育における高大連携のありかたを考えるものである。この研究のスタートは英語に苦手意識を持つ高校生の実態と現在行われている高大連携の現実が乖離していると感じたからであった。調査によれば、高校生の大半が英語が使えることの重要性を強く認識しているが、彼らの半数は英語に対して苦手意識を持っている。さらに、自分が大人になった時には英語を使う必要がある世の中になっていると考える高校生は多いが、実際に自分が英語を使って仕事をするイメージを持っている高校生は少ない。英語に苦手意識を持つ高校生に英語学習を「他人事」のようにとらえる傾向が多く、自分の問題として考える意識を持たせることが重要であると思われる。このような高校生の場合、大学に行きたいと思ってもその準備に着手するのが遅れたり、自分が将来何になりたいか具体的に考える機会を逃したりしがちである。英語への苦手意識をもつ高校生が全体の約半数を占めるということは、この問題に積極的に取り組む必要があることを示している。

さて、1990年代からのいわゆる高大連携は、どちらかという優秀な高校生が一足早く高等教育に触れる機会を提供するという意味で用いられることが多く、英語などの勉学に苦手意識を持つ高校生がその恩恵に与る機会はいわゆる優秀な高校生に比べるとはるかに少なかった。

筆者は過去に高校教員として英語やその他の勉学が苦手な高校生を間近に見ており、大学教員となった現在、さまざまな研究から得られた知見が苦手意識を持つ高校生の支援に活かせるのではないかと考えた。そして、高校教員と連携して研究を進め、エリート高校生のためではなく、日ごろから勉強に悩みをかかえる高校生のために高大連携の成果を享受できる機会を提供したいと考えた。

具体的に研究計画を立てようと思っていた矢先に、高校教員時代の教え子から札幌市内の某私立高校の教頭をしていると連絡があり、彼から生徒に話をしに来てほしいと依頼された。このことをきっかけとして、英語に苦手意識を持つ高校生を支援するために高大連携のプランが具体化した。2017年度は高校長・教頭にこのプランを説明し、協力を求めた。先方の管理職も大変喜んでくださり、私が学校に定期的に訪問したり、担当教員や生徒に聞き取り調査をしたりすることを許可してくださった。幸いなことにこのテーマで科学研究費（2018～2021年度）を取得することができ、旅費を心配せずに高校訪問ができるようになった。2018年度は月～木に授業が入っていたため、高校訪問は週末、あるいは大学の夏季休業中（札幌の高校は夏休みが短い）などに実施した。また、2018年度末日からの1年間、獨協大学の学外研修の制度を使わせていただくことができ、授業を免除していただいたおかげで、札幌を数日単位で訪問することができるようになった。（学外研修は2019年3月31日～2020年3月30日であった。書類上は2018年度の研修であったが、実質的

には 2019 年度であったので、本報告書では混乱を避けるため 2019 年度と言及することを許されたい。本報告書は、科研費研究 2 年目の学外研修期間のものである。）

(2) 研修の概要

フィールド校：英語に苦手意識を持つ高校生が多く在籍する札幌の私立高等学校
進学コースの生徒（各学年約 60 名）と担当教員 2 名

研修受け入れ先：札幌市立大学 町田佳世子教授

(2-1). 2018 年度

2018 年度は科研費研究の初年度であった。筆者の本務校と高等学校が距離的に離れていることから、訪問は週末中心の限定的なものとならざるを得なかった。2 か月に 1 回の訪問時には、担当教員との打合せ、授業参観などを中心に実施し、訪問できない期間には、インターネットを通して詳細に意思疎通を行った。具体的には 2018 年度は 2018 年 4 月、6 月、11 月、2019 年 2 月、3 月の計 5 回訪問した。2018 年 7 月にはオンラインによるアンケート調査第 1 回、2019 年 3 月には第 2 回を実施した。第 1 回アンケートの結果についての考察は、2018 年 12 月に行われた第 10 回日本リメディアル教育学会九州・沖縄支部大会（佐賀県）で発表した。

(2-2) 2019 年度・主たる研究校

獨協大学から学外研修の機会を頂いた 2019 年度は、4 月～2 月まで毎月訪問し、それぞれ 3～5 日間、高等学校に終日滞在した。小さい会議室を控室として準備していただき、担当教員の授業にはもれなく出席し、教室の後ろに立って授業メモをとった。そのメモはフィードバックとして、Google Drive を通して共有した。また、訪問中はほぼ毎日放課後に打ち合わせを行い、授業のしかた、生徒の意識、面談の計画など細かく調整した。この打ち合わせについては担当教員（2 名）または私が議事録を作成し、Google Drive で共有した。この議事録は単に事実を記録するのみならず、その時々教員が何をどのように感じ受け取ったか、率直に書かれており、読み返すとその時々を克明に思い出す頃ができる、貴重な記録となっている。研修中の授業観察メモは A4 で 30 枚以上、打ち合わせ議事録は 20 枚以上になった。

6月27日(木) 2年2組3限 (10:50-11:40)

担当教員：小熊先生、ハンナ先生

教科書：Vivid English Communication II

Lesson 2: Fun with Pakkun

10:50 Target 1900 Repeat after the teacher. Study 2 minutes
10:52 Quiz
11:00 Target次回の範囲確認 No. 181~
11:03 Hanna's Warm-up time -Riddles—
11:13 Lesson 2 Part 1の復習・語彙の確認
conversation, move to, impossible, plan etc.
Lesson 2 Part 2プリント配布
11:16 Part 2プリントのRound 2, 3, 4自習 Study 4 minutes
生徒を指名して黒板に解答を書かせる、答え合わせ
11:36 Close the textbook and answer the teacher's questions
What is "material" in Japanese?
When did Pakkun start Manzai? etc.

観察1：(志賀先生の授業でも感じたが)、「ここは難しいです」とか「これは難しいのでもう少し時間をとります」といった、「難しい」という表現がかなり頻繁に使われていると感じた。これは、生徒にはポジティブな印象を与えないと思う。「難しいのだからちゃんとできなくても良いのか」と思わせないようにしたい。英語のchallengingは日本語では難しいと訳すことが多いが、ニュアンスは異なる。

授業観察メモの一例

2020/2/13

書いた人：小熊

- ・授業プリントに関して、単語の品詞を先に書いておくのが良い。カタカナ語を答えさせる問題は極力避ける。
- ・単語と既知の知識を結びつけるような声かけをする。(例:land, play an important role, spices)
- ・応用で習った単語やフレーズを使って短文を作らせる、言わせる。
- ・教科書暗唱へのアプローチ。
- ・2年生6名は勉強に対する意欲・取り組みが良くなってきている。授業でも、もう少し負荷をかけても良いのでは？
- ・見やすい板書(黄色)、大きい声。生徒のストレス軽減。
- ・今日の振り返りを必ず入れる。
- ・弾丸インプット

http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h15/13chuueigo/english/bulletinput.htm

打ち合わせ議事録の一例

このような地道な授業観察と打ち合わせを続け、教室訪問を繰り返すうちに高校生ともある程度の信頼関係ができてきたと感じ、高校生からアンケート等の量的なデータだけでなく、面談のような質的なデータを頂ける時期に入ったと判断した。高校2年生と3年生それぞれ約10名に訪問時の昼休みまたは放課後、フォーカスグループインタビューを行った。



観察した授業の一例



学年主催プレゼンテーション大会

意識調査アンケートは、前年度と同様に7月と翌3月に予定していた。7月は予定通り実施できたが、翌3月は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、札幌の学校は休校となったため出張もかなわず、アンケート調査もできなかった。

2019年8月の学会発表のための資料作成の段階で、共同研究者である高校の担当教員2名に感想を求めたところ、以下のような返答があった。

岡田先生 蒸し暑い中、学会準備お疲れさまです。

①自分の中で変わったこと、考えたこと

・自分の授業を1~2ヶ月の間隔で岡田先生に客観的に見ていただき、自分の授業の改善点や生徒へのアプローチの仕方の工夫などをアドバイスしていただくことで、より良い授業にしていこうという気持ちが今まで以上に強くなった。また、自分は毎日見ているのでなかなか気付けない生徒たちの成長している点や変わってきている点も、岡田先生に指摘していただいで気付くことができた。

・今までは、1コマの授業や教科書の1単元を進めることで精一杯になりがちだった。だが、その授業の内容や教科書等をもとに学んだことをいかに生徒たちの実生活に活かす工夫ができるか、を考えて授業展開していくことが大事だと、岡田先生との関わりの中で考えさせられた。

②期待以上だったこと

・私たち教員だけでなく、岡田先生に関わっていただいている生徒たちも少しずつ良い影響を受けてきているように感じる。特に、30名以上のクラスで教科担任1人ではなかなか生徒全員に目配りできないこともあるが、岡田先生と一緒に授業に入ってくださり、単語の発音や覚え方のポイントをお話してくださることで、生徒たちの良い学びにも繋がっていると感じられる。

・日頃自分が高校生に英語を教えている中で舌打ちしていることが、大学生に英語を教えている岡田先生も共通した課題を持っていらっしゃることを知り、中学・高校の英語教育だけでなく、大学等に進学後にも活きる英語力を身に付けさせることが大事だと感じた。また、そのためにはどのような指導を行っていったら良いのかということも色々話し合わせていただき、自分の授業を行う上でのヒントを得られた。

③これから期待すること

・英検等の検定に向けた学習指導等も重要だが、高校卒業後も実社会で生徒が活用できる英語力を向上させるにはどうしたら良いのか、ということも岡田先生とともに考えていきたい。

・生徒に基礎的な英語力を身につけさせるためのより良い指導法を考えていきたい。また、それを“新陽メソッド”のような形で、新陽の英語教員全体で同じように指導していける体制を整えたい。

8/20

書いた人：小熊

学会準備お疲れ様です！以下乱筆ながら書かせていただきます。

①自分の中で変わったこと考えたこと

・教員として教えることへの責任感や自分自身が学ぼうとする意識の変化。やる気がなかったわけではないが、なんとなくあなあって自分の教えやすい授業を進めていたのが、岡田先生と出会ってチャレンジする気持ちや、もっと自分の教育力を高めたいと思えるようになった。

・以前まではわからない生徒に対する対応に苦慮したただ闇雲にもがいていたが、対話を通じて改善点が明確になり、様々なアプローチを試せるようになった。

②期待以上だったこと

・長期スパンで自分の授業を参観していただき、アドバイスを貰えること。自校の先生からは見えない視点や意見を教えていただけるのが本当に勉強になる。自分の弱点や強みを教えてもらえて励みになる。

・教え方で困っていることや、悩んでいることを一緒に考えることができること。教員は自分一人で抱え込みがちであるが意見交流をするなかでヒントが見えたり、感覚を共有できたりすることがとても助かっている。

③これから期待すること

・生徒の成績向上（英検の取得率やGTECのスコアアップなど）
・生徒の意識変化（英語を勉強するとこんなことに繋がるなど）
・教員の意識向上（私達から他の先生方に繋がっているような。もっと英語科全体で意識向上したい）

上記のようにポジティブなフィードバックを頂き、言語習得や英語教育学研究の知見を活かしながら授業改善を行っていくことの意味を感じることができた。年度後半には、生徒の基礎力を深めていくにはどうしたらよいかについて検討を重ね、高校生のためのリメディアル教材の開発に着手した。これは、中学校の学習内容が身につかず高校に入ってきた生徒のための復習教材であるが、(株)アルク社の協力を得て、短いアクティビティを数多く作成し、インターネットを通して関心のある先生方に自由に利用してもらう計画である。また、こういった教材は、大学リメディアル教育にも示唆をもたらすと確信している。本来であればこの教材を使つての高等学校の授業を2020年4月に開始する予定であったが、高等学校が遠隔授業となつてしまい、担当教員から対面授業になつてからこの教材を使いたいという申し出があり、現在は待機状態となつている。

(2-3) 2019年度・その他の活動・研究成果発表

英語に苦手意識を持つ高校生をいかに動機づけるか、教員の教育力を上げるか、というテーマでの高大連携の活動を続ける中、大分県教育委員会からお声がけを頂き、大分県教委の授業研究会や小中高大連携の勉強会でお話をさせていただく機会があった。これも学外研修中のために時間を都合することができたためであった。また、埼玉県教育委員会からの依頼により、研究会に助言者として参加することもできた。さらには、長らくお世話になっている埼玉県立不動岡高等学校のSSH(Super Science High School)事業の一環として、科学プレゼンテーションと英語力について全1年生にお話をしたり、同じ不動岡高等学校のSGH(Super Global High School)発表会に助言者として出席したりすることができた。この1年間の主な活動は以下のとおりである。

[論文]

研究ノート 「高等学校英語教育における高大教員の連携」
獨協大学外国語教育研究所紀要第8号

[学会発表]

日本リメディアル教育学会第15回全国大会(於金沢工業大学)
「英語学習を自分の手に取り戻すー英語教育における高大連携」(2019年8月27日)
日本リメディアル教育学会第11回九州沖縄大会(於沖縄産業支援センター)
「高校生の英語基礎力養成に果たす高大連携の役割」(2019年11月23日)

[講演]

大分県立竹田高等学校授業研究会での講話
「新大学入試制度を見据えたこれからの小中高の連携のあり方」(2019年9月11日)
埼玉県立不動岡高等学校SSH(Super Science High School)事業での全1年生への講演
「First steps to a scientific presentation」(2020年1月8日)

[その他の社会活動]

大分県教育委員会高校教育課主催「第2回中高の学びをつなぐ連携協議会」助言者
於大分県立竹田高等学校(2019年11月19日)
大分県立竹田高校英語科特別研修会講師(2020年2月7日)
埼玉県英語指導法改善事業文部科学省委託「生徒の発信力強化のための英語指導力向上事業」助言者
於埼玉県立春日部女子高等学校(2020年1月29日)

(3) 結び

非常に実り多い、忙しい学外研修の1年を過ごすことができたことを深く感謝したい。しかし、研修年度の終わり近くに新型コロナウイルス感染症が拡大し、いろいろな活動ができないままに終わってしまったことは非常に残念であった。特に2020年3月にはシンガポールでの大きな語学教育の国際学会での発表に採択されていたのだが、学会そのものがキャンセルとなってしまった。2020年度も見通しは立たず、オンライン授業の準備に時間がかかり、研究が遅滞していることは否めない。2020年度は科研費の最終年度に当たるが、1年間の延長手続きをして、より安定的な研究環境が整うのを待つ予定である。札幌の高等学校も休校や時差登校などにより、当初計画していた活動ができない状況であるが、担当教員とのコミュニケーションは切らさずに続けており、今後も充実した研究活動を続けていきたいと思っている。

最後にこのような充実した研修の機会を与えていただいたことに対し、あらためて深い感謝の意を表します。ありがとうございました。